

21世紀

5

APR. 2000

モダニズム研究会会報

目次

■投稿

- 1 村田 靖子 忘却のすすめ——イスラエルで想うこと
2 長畑 明利 「読者の死」——ミンチン・マー氏に聞く

■海外出張報告

- 7 稲賀 繁美 エジプト調査の報告

■研究会発表報告

- 10 野坂 政司 デジタル・スペースと身体——巨人の肩車から見える世界と手触り
12 長畑 明利 他者に成り代わる試み——アラキ・ヤサダの実験
13 稲賀 繁美 岡倉天心とインド——越境する近代国民意識と汎アジア・イデオロギーの帰趨

■パネル・ディスカッション「越境について」

- 15 鈴木 将久 日中戦争期の中国モダニズム—香港の位置をめぐって

■講演要旨

- 17 崎山 政毅 メキシコのユリシーズ
17 港 千尋 ワールブルグの《記憶の女神》

■出版プロジェクト各幹事より

- 20 西 成彦 第1章 20世紀における表現とディアスポラ状況
20 三宅 昭良 第2章 越境と文化アイデンティティ——あるいは<越境>とは何か
22 大平 具彦 第4章 モダニズム／アヴァンギャルド表現の再検証：概要とコメント

■資料

- 23 出版一覧

編集後記

エジプト調査の報告

稲賀 繁美

25日深夜にカイロ到着。目下カイロ大学日本語科で教鞭を取る鈴木貞美教授一家のお世話で、ナイル川中洲のザマーレクにある、ペンション・ザマーレクに到着。ここを基地とする。翌朝よりまず、エジプト考古学博物館の見学。展示の政治学という見地から、ここ十数年にわたる同博物館の展示方針の変化を検討する。八十年代には、いわば西洋からの眼差しに晒されるオリент世界という受け身の立場を当然としていた発掘品の羅列が、今回はポスト・コロニアル状況への自覚とその反応としての、ガイドの今まで以上の"タカリ"根性の昂進、また外国人観光客相手の展示美学の洗練(とりわけツタンカーメン関連展示品の、美術宝飾品としての展示姿勢、ミイラ室別料金という経営"改善"、中国製品中心のスーヴェニア・グッズ売り場の充実)が確認された。おりからの断食月もあり、公共施設は午後三時過ぎですべて閉鎖、特有の社会階層の事情もあって、博物館員との予約なしの面会は実現しなかった。ムハンマド・アリー・モスクの見学、ギゼーの遺跡管理局との接触も、こうした状況ゆえに果たせず、わずかに観光局の窓口の係員と接触を持ち、意見を交換するにとどまった。

27日にはコプト地区の重要な史跡を訪問。コプト美術館でも、おそらく断食月の影響か、館員との接触は不可能だった。とまれ、1983年当時と比較して、少数民族擁護政策の現れか、マル・キルギス教会ほか、美術館周辺の歴史的環境の再整備の進展を確認することを得た。特に1983年当時は線路に下車するだけの郊外電車が、今では立派に地下鉄となっていた。

28日には早朝空路ルクソールに飛び、19世紀西欧絵画におけるオリент世界表象のありさまを現地において検証する機会を得た。ジャン＝レオン・ジェロームが一八七三年のサロンに展示した《誘拐》(ナント)はルクソール神殿を背景として、アラブ時代の政治的な誘拐を物語り風に描くが、この作品の制作のために画家がエジプト旅行で踏破した地点をほぼ同定することができた。カルナック神殿では、午前中の見学と夜になっての光と音の演出を通して、歴史的・考古学的知識がいかにか教育的なプログラムに組み入れられて現在用いられているかを検証した。アクナートンを世界最初の一神教の主導者として描く歴史解釈には、イスラーム国家としてのエジプトのおかれた位置と、西欧キリスト教国への配慮が伺われ、これを直接訳した日本語での解説に対する日本人観光客の反応からは、こうした演出と日本における高等学校などでの世界史教育との落差に由来すると思われる違和感が観察された。29日には王家の谷を見学した。その入り口にあたるナイル西岸では、多くの一九世紀オリエンタリスト画家に題材を提供したのみならず、早くは古代ギリシアにおけるパウサニアスの旅行記から、近くはヘンリー・ミラーなどにいたる著述家の想像力を刺激してきたメムノンの巨像にまつわる記憶を検証した。今回の調査では、オリエンタリズムにおける観光人類学的な視点も考慮に入れたが、とりわけ王家の谷におけるガイドの説明には、対象とする客の国民性に合わせて、内容・文体に著しい対比の見られることが、改めて確認できた。

30日にはカイロに戻り、まずイスラーム美術館における、イスラーム展示の在り方を、歴史的変貌をも視野に入れつつ検討した。美術館という、いわばイスラームとは無縁の西欧近代の装置と、そのなかに無理やり取り込まれた異文化要素とのちぐはぐな混在の様子は、これ

まで体系的に文化交流における価値観の相克の問題として取り上げられることがなかった。だがペルシア、トルコ、インドさらには東南アジアから日本を含む東アジアにいたるまで、博物館という仕組みと、そこでの展示にまつわる政治学は、ポスト・コロナル状況を喧伝される今日において、文化摩擦の浸透圧と化学変化、さらには放電現象の現場として、地球的な視野からの体系的な比較検討を求められていることが、改めて納得できた。同日の午後には、カイロ市街北部のエル・ハーキム・モスクを訪れた。ここは一九世紀三〇年代に、プロスペロ・マリヤが訪れて、いわばロマン主義的廃墟の美学というフィルターを通してオリент世界を図像化した舞台であった。マリヤがグレコ・ローマンの廃墟趣味をエジプトに投影したことと同時に、カイロでもっとも古いイスラーム市街防衛の要でもあったフトーフ門を疎かにして、ひたすら牧歌的な解釈を加えていることも判明した。この日の夜には、こうした調査の中間報告を兼ねて、カイロの国際交流基金で英語での即興の講演--話題提供--をするとともに、現地の知識人と有益な意見交換をする機会を得た。深夜まで席を設けて下さった担当の遠藤、高橋両氏、および会合を企画された鈴木貞美教授、カイロ大学のムハマド・ファトヒ教授ほかの皆様、この場を借りて、ひとこと篤く御礼申し上げたい。

31日は金曜日でイスラームの祝日がたまたま西暦では第二千年紀の最後の日と重なった。今までの強行軍がたたってやや風邪気味のため、調査活動は控えた。夜になって、ギゼーのピラミッドで、ムバラク大統領の肝入りで、イギリス統治下でのスエズ運河開通に合わせた歌劇アイダ初演にも匹敵するアトラクションが挙行された。ジャイカの関係者が、テロへの心配から急遽欠席を命じられたため、入場券を譲り受けて会場に向いた。だが、要人招待の警備に加え、公称五万人に昇る入場券購買観客の交通整理の混乱、さらには折からの濃霧発生もあり、結局現地の駐車場までたどり着いたところで、見学は諦めて帰路に着く。

西暦では二千年元旦。朝から濃霧が続き、予定していたシャルム・エル・シャイムへの移動は、航空機の状況が分からないまま放棄を余儀なくされる。このため、予定を変更してサッカーを訪問。世紀末にタヒチにわたったポール・ゴーギャンが携帯したいわばポータル美術館の図像資料のなかにはサッカーの浮き彫りの写真が含まれていたことが知られている。そのオリジナルとの照合を果たす機会がこうして得られたのは幸いだった。ゴーギャンに端を発する二十世紀からの「始源主義 Primitivisme」がそのイデオロギー的なより所を古代エジプトに求めたのは、決して偶然ではない。その精神史復元の鍵がここにあった。

翌日シャルム・エル・シャイムに、予定を一日遅れて到着。ここでの眼目は、長らくイスラエルによって前線基地として利用されていた土地が、エジプトへの返還後、いかに観光資源として再利用・開発されるに至ったか、という観光人類学および都市開発の検討にあった。おなじエジプト国内でありながら、西欧の主要リゾート経営企業が参入し、また地域によって、ドイツ、イタリア、フランス、ロシアなど顧客の国籍で色分けでき、もっぱらドルのみが通用し、バクーシを要求せず、しつこく品物を売り付けようとする商売根性や集り[たかり]とも無縁で、ラマダーン[断食月]とも断絶し、すっかり西欧的市民社会の流儀の責任意識を模倣した現代の租界。周囲のアラブ世界からは隔絶されたこの「別天地」では、ある意味で"殺菌"され、"西欧化"された人口都市の模造スークの実態をつぶさに観察することを得た。

4日にカイロに帰着。さっそく国立近代美術館、アート・センターを訪れる。前者では、改装中ゆえその全貌を掴むには至らなかったが、幸い館長との面会をその場で取り付けることができ、館の運営に関して質疑応答を得たほか、エジプト近代美術--日本ではまだ手付かず同然の分野--に関する刊行物の寄贈を受けた。アート・センターでは責任者は不在だったものの、現場で現代の作家たちの展覧会を企画している責任者と意見を交換できた。夕刻には一橋大学で社会言語学の博士号を取得したアーデル・アミン氏の案内で、通称ファラオ美術館を訪問し、私立の主導によるエジプト文化・芸術紹介の企画のありかたを詳しく観察する機会を得た。科学的には多々問題のある企画でも、逆にその歴史的に拘束された観点(例え

ばアレクサンダー大王に対する、素朴な敬意の吐露)、エジプトにおける現在の労働コストの低さを物語る、実演つきのファラオ時代の生活の再現展示、また王家の谷とエジプト考古学博物館とに分離されて一括には復元できていないツタンカーメンの墓の原寸大の復元、さらにはイスラーム圏各地に風俗・文化に関する教育的配慮あふれた展示などは、国家主導の文化政策あるいはプロパガンダとは一線を画した、ある時代の展示イデオロギーを証しするものとして、博物館の系譜学、政治学という文脈のなかで、珍重に値するだろう。

5日には早朝から、年末に調査し損なったギゼーのピラミッド周辺の発掘の歴史的経緯と現在の観光政策を検証した。ピラミッドの周囲を利用した、膨大な質量の乗馬訓練所の存在が、今日にいたるイギリス植民地支配の痕跡として理解できた。いわばこうした外国人旅行者や滞在者相手の廃舎のなりわいのなかに、ポスト・コロニアルといわれる現今の世界の経済的力関係が集約されている。出発以前には予期していなかった調査対象から、二十世紀初頭、イギリスの属国となっていたエジプトのモダニズムの実態に迫る鍵が得られた。

6日にはワディー・ナトゥールン訪問。ナトリウム塩が噴き出た涸れ谷は、コプト教の修道院がかつて数多く点在した場所として、記憶されている。おりからコプト暦での主の誕生祭前日にあたっていて、残存する最大の修道院、聖マカリウスは訪れることができなかったが、ピシヨイ修道院、聖母修道院、それに西はずれの処女マリア修道院はつぶさに視察でき(あわせて、市販の案内所の誤謬も訂正することを得)た。観光客は普段訪れることも少ない、こうした辺境が、実は先進的な学問僧たちの努力でホーム・ページを開設し、世界との接触を積極的に図っている、といった実態には、なにか白昼夢を見ているような驚きがあった。

この日の夕食の宴には、鈴木邸にジャイカの大高夫妻をはじめとした関係者や、先に述べた、ファトヒ、アミン氏を始めとするエジプトの学者たちも招かれ、有意義な学術情報の交換がなされた。帰国日の7日の午前には、ザマーレクの近所に最近開館された陶磁器美術館を訪問。西欧の美術範疇では必ずしも美術作品とは認定されず、応用芸術として軽視されることの多かった作品に焦点を当てた、イスラーム文化展示の政治学を改めて反芻した。

最後に一言するならば、今回筆者が調査の拠点としたペンション・ザマーレクは、一橋大学の加藤博教授ほか現地調査のたびに世話になっている宿であり、その宿泊者たちから得る情報は、鈴木家の運転手、サイド氏のそれと並んで、極めて貴重な証言となった。ラマダーン期間中の調査としては、著しく効率も良く、密度の高い調査が行えたことに関しては、鈴木教授はじめ、関係者に深く御礼申し上げる。なお本調査での知見、とりわけ19世紀西欧のオリエンタリズムの現場検証、エジプト近・現代美術の動向および現今の美術館行政の政治学に関しては、科学研究費による研究の一環として、今後順次発表してゆく予定である。

西暦2000年1月28日記

1999年12月19日 東京外国語大学4号館6階中会議室

岡倉天心とインド——越境する近代国民意識 と汎アジア・イデオロギーの帰趨

稲賀 繁美

岡倉天心(1862-1913)の著作、とりわけ『東洋の理想』(1904)と、生前未刊の草稿で通称『東洋の覚醒』を、天心の第1次ベンガル滞在(1901-02)との関連で分析する。まず天心のインド旅行と、ヒンディズムの近代的再興の中心人物ヴィヴェカーナンダ(1864-1902)との出会いの媒介となったジョセフィーヌ・マクラウド(1856-1948)、さらに天心の草稿に筆を加え、出版を取り図ったシスター・ニヴェディータ、本名マーガリット・エリザベス・ノーブル(1864-1911)の役割を検討した。マクラウドなくして天心のヴィヴェカーナンダとの出会いなく、またニヴェディータなくして今日しられるような『東洋の理想』も存在しなかったといつてよい。本件にはすでに堀岡寿美子、岡倉古志郎らによる先行研究

が知られるが、今回はマクラウドの伝記、ニヴェディータの『書簡集』を利用して、東洋文化に帰依しその伝導者となった白人女性という存在に注目した。ヴィヴェカーナンダのシカゴ万国博覧会（1892）での伝説的な成功に肖り、第2回目の「世界宗教会議」を画策した天心の企ては失敗に終わるが、天心のセントルイス万国博覧会での講演（1904）には、両者に通底する思想的基盤が見える。

天心の『東洋の理想』には、ヴィヴェカーナンダの不二元論 advaitism の考えを強引に東洋美術の歴史的伝播に引き付けて解釈した面が窺われる。有名な「アジアはひとつ」もこの文脈で理解できるが、そこにはまた東洋の立憲君主制独立国としての日本と、ベンガル分割令（1905）によって遠からず分割の運命を辿ろうとしていた植民地インドとの対比が、政治的な意図としても反映している。天心のインド滞在中の執筆になる『東洋の覚醒』の草稿「我らはひとつ」は、なによりもまずこうした状況に置かれていたインドの知識人たちとの連帯を謳いあげる天心のアジテーションだった。しかしこの原稿は、日露戦争を経て日本が列強の仲間入りをし、天心自身もそうした『日本の覚醒』（1905）を擁護する論陣を欧米の読者に向けて説くにおよんでは、もはや出版の可能性もなくなった。それが皇紀二千六百年の前年（1939）に『東洋の覚醒』として復活したのは、まさに亡霊の蘇りといってよい現象だった。

一方、おりからのスワデシ運動でインドにおける国民主義的なイデオロギーが高揚した20世紀初頭、『東洋の理想』は、インド美術史記述にインド中心史観を齎すうえで先駆的役割を果たす。E.B.ハベルの一連の著作、とりわけ『インド美術の理想』への天心の感化は明白だが、A.クーマラスワミーの初期著作も含めて、1910年代にはインド美術の独自性を、ヴェーダ哲学との関連で説く潮流が大きくなる。そのなかで、ガンダーラ美術をグレコ・ロマンのカノンの影響ゆえに高く評価してきたそれまでの論調は転換を迫られる。だが同時代の研究動向を総合したV.スミスの著作では、ガンダーラに中国の影を見る天心の説は、思想的影響力はとにかく、学説としては検証に耐えない謬見との烙印を押されることになる。

日本でもその晩年以降、イデオログとしての天心像が定着するのとは裏腹に、美術史研究の世界では、天心はもはや時代遅れの先駆者として厄介払いされた傾向が見られる。1900年パリ万国博覧会のために準備された *Histoire de l'art du Japon* は、天心が編集を離れてのち、水戸国学寄りの枠組みに修正された、との仮説（小路田泰直）もある。当時の腹心、伊東忠太は、同書日本語版『稿本日本帝国美術略記』（1916）では建築の部をそれ以外の分野から切り離し、いわば建築史学の独立宣言を行う。またかつての腹心、大村西崖は、天心と袂を分かって後、『審美大観』、『東洋美術大観』の膨大な編集を経て、実証的な中国美術研究の礎を築く。また東京大学初代の美術史講座教授に就任（1911）した滝精一は、天心設立の美術研究誌『国華』の編集を襲いながら、天心没後の号（1913）に、追悼記事の代わりに、天心らによる日本美術院の試みを「失敗」と詰る、誹謗中傷の無署名記事を掲載する。天心がその思想的な基礎を築いた東洋美術という枠組みがその次ぎの世代によって制度として継承されたとき、創設者はいわば「父親殺し」よろしく葬りさられた、といっても過言ではなからう。



MODERNISM
RESEARCH
SOCIETY



『21世紀』（モダニズム研究会会報）第5号

発行日：2000年4月27日

編集人：三宅 昭良

発行所：モダニズム研究会

事務局：〒192-0397 八王子市南大沢1-1 東京都立大学人文学部英文専攻#453

cover design : Akihiko Inoue